

48 炭素の分解及無結晶炭素の沈澱に依りて著しき内部ストレーンを生ずるなり。是等放射狀龜裂は常に燐出現の個所に沿ふて起り燐量を制限せは龜裂の厄難より免かれ得。少くも九〇〇度(攝氏)以上に赤熱さるゝ爲め燐ユーテクチックか熔融し内部ストレーンを増す事も龜裂原因の一つなり、研究未だ充分なれされと、燐、硅素の各元素か共に黒鉛片の膨脹に大なる影響を與ふる事も確實なり、要するに龜裂を防止せんと欲せば是等元素の含有量も最小に制限するを要す可し、譬へ龜裂を起さすとするも高熱に於て高燐の鑄鐵か低燐の夫れに比し非常に弱き事は明かなる事實なり、然し嚴格に言へはピストンヘッド龜裂の原因は普通のグロースと異なり、表面僅少の酸化に止まりて唯グロースの初期たる觀を呈するに過ぎざるなり(未完)

◎製鐵業調査會答申書

曩に農商務大臣より製鐵業調査會に諮問せられたる事項に關し同會に於て決議答申せられたるものに付ては其都度略報せる所なるか以下順次調査書及參考書類を掲載する事とせり、但し機密に關する部分ば之を省略せり。

第一諮問事項 製鐵原料の調査及供給に關する事項。

答 申

本邦に於ける鐵鑛に付ては既に當局に於て大體の調査を了し其鑛量は將來猶ほ増進するものあるへしと雖も、我國の現在並に將來遞増すべき需要額に對しては到底之れを充たすに足らざるか故に其供給は主として之を海外に求めざるへからず、然るに海外鐵鑛に對する調査は未だ十分なりと認むるを以て今後一層其調査に努め供給を得るの途を講ずるは最も緊切の事項なりとす、但本邦鐵鑛に付ても其開發に努むること極めて緊要なるか故に其開發を圖るに必要なる手段

方法に付具體的に講究するを要す。

一、本邦鐵鑛の開發を助成するに必要なる事項。

(イ) 調査採掘及設計に關し技術上の援助を與ふること。

(ロ) 鐵鑛運賃の輕減を圖ること。

(ハ) 製鍊上必要なる木炭の供給に關し便宜を與ふること。

(ニ) 官設製鐵所に於ては貧鑛、粉鑛及不良鑛に對しても將來一層利用の途を開くこと。

二、硫化鐵鑛、焚滓を製鐵原料に供用するの途を講し之に對して鐵鑛と同様に前項(イ)(ロ)(ニ)を適用すること。

三、重要鐵山に對しては必要の際相當多量の鑛石を搬出し得べき設備の調査を爲すこと。

四、赤谷鐵山に對して特に調査の上作業の開始に必要な設備を爲すこと。

五、本邦産骸炭用石炭は製鐵業の堅實なる發達に對し不足なるか故に官設製鐵所は出來得る限り本邦石炭を製鐵用に利用する方法の研究に努むること。

六、東洋、南洋及濠洲方面に於ける鐵鑛、滿、俺鑛及特殊鋼用鑛物を含む所在地を調査し之れか供給の途を開くに努むるの必要あること。

七、前項の調査は迅速に著手し技術上鑛量及鑛質等を調査すると同時に深く經濟上の調査を爲し採掘運搬等の關係を考査し之を利用するに付きての見込を樹つること。

八、外國に於ける骸炭用石炭に付ては鐵鑛と同様の方針を以て調査し及現實に其供給を得るの途を講ずること。

九、外國に於て鐵鑛、石炭其他の製鐵用原料の調査を爲し又は之れか供給の計畫を爲すものあるときは政府は適切なる援助を與ふること。

十、特殊鋼の製造に必要な鑛物の探掘製鍊に付ては政府は特に之を援助すること。
 第二諮問事項 製鐵業の種類調査に關する事項

答 申

第二諮問事項に關する調査事項は極めて洪汎錯雜且つ參考に資すべき材料に乏しく精密の調査を了する能はざるを以て左に大體調査の結果を答申すへし。

一、本邦に於ける銑鐵(製鋼原料を除く)及鋼材の既往に於ける需要額及將來に於ける需要見込額左の如し。

銑鐵需要額調

年次	内地產出高	輸移入高	合計	製鋼原料高	輸移出高	差引需要高
明治二十九年	二六、一三三 <small>佛蘭</small>	三九、〇三五 <small>佛蘭</small>	六五、一五七 <small>佛蘭</small>	?	?	?
同 三十年	二六、八七七	四三、六四三	七〇、五二〇	?	?	?
同 三十一年	二二、四八〇	六三、四〇一	八五、八八一	?	?	?
同 三十二年	二〇、七五二	二七、二四四	四七、九九六	?	?	?
同 三十三年	二二、三〇三	二二、七五八	四七、〇六一	?	?	?
以上五ヶ年間の年平均	二三、三〇七	三九、四一六	六三、三三三	?	?	?
明治三十四年	五六、八三四	四三、一六〇	九九、九九四	?	?	?
同 三十五年	三九、六〇四	二九、九三八	六九、五四二	?	三五	?
同 三十六年	三〇、四七八	三七、七六一	六八、二三九	?	八四	?
同 三十七年	六四、八五三	六四、八八五	一二九、七三八	?	一四八	?
同 三十八年	七九、二六八	一五三、二〇五	二三二、四七三	?	一四〇	?

以上五ヶ年間の年平均

五四、二〇七

六五、五九〇

一一九、七九七

(五九、七二〇)

八一

(五九、九九六)

前五ヶ年の年平均
に比し増進割合

一一、二六七

六、六四

八、九二

—

—

—

明治三十九年

一四五、四五五

一〇三、四三三

二四八、八九八

一一三、三五四

三七三

一三六、一七一

同 四十年

一四四、二三四

九八、八八八

二四三、〇二二

一一八、九二〇

四九二

一三三、六一〇

同 四十一年

一四六、六二〇

九六、六六六

二四三、三三六

一一三、六八五

六八六

一一九、八五五

同 四十二年

一六五、五七四

一一九、二三三

二八四、八〇六

一四三、一七五

四八九

一四一、一四二

同 四十三年

一八九、四五二

一〇八、七三一

二九八、一八二

一八八、三六七

五六九

一〇九、二四六

以上五ヶ年間の年平均

一五八、二四五

一〇五、三八二

二六三、六二七

一三九、〇九八

五三二

一一四、〇〇七

前五ヶ年の平均に比
し増進割合

一九、九一

六、〇七

一一、〇一

(一三、二九)

—

(一〇、六七)

明治四十四年

二〇四、六三三

一九五、六三九

四〇〇、二六一

一九八、三六七

—

二〇一、八九二

大正元年

二三九、一六八

二三三、一〇四

四七一、一八三

二四七、四三八

三三四

二三三、四三〇

大正二年

二四二、六七六

二七三、三二〇

五一五、九八六

二六六、九九一

一、三八八

二四七、六〇七

大正三年

二九九、四六一

一七二、一三四

四七一、五九五

二九七、三三〇

一八七

一七四、一七六

大正四年

三二九、八三三

一七三、六八五

五九三、五二七

三三八、四八三

—

一五四、〇三四

以上五ヶ年間の年平均

二六一、二五二

二〇九、二五五

四七〇、三〇八

二六九、七〇〇

三八〇

二〇〇、三三八

前五ヶ年の年平均に
比し増進割合

六、五〇

九、八五

七、八四

九、三九

—

六、二五

備考 製鋼原料高中には鍊鐵原料を含む又()は推定數を掲げたるものなり

銑鐵需要見込額調

前表に依る明治三十四年より同三十八年に至る五ヶ年間の需要平均額は製鋼原料高不詳なる爲
め確數を得難きも約五九、九九六佛噸と推定せらるゝを以て是を其中間明治三十六年の需要高と見

52 做す。

明治三十九年より同四十三年迄の平均額は一二四、〇〇七佛噸にして是を其中間明治四十一年の需要高と見做す。

明治四十四年より大正二年迄の平均額は二二四、三〇九佛噸にして是を大正二年の需要高と見做す(大正三、四年は歐洲戰亂の影響に依り輸入減少し其事情平年と異なるを以て之を除きたり)

年次

需要高

五ヶ年間の
需要増加額

増加額の増率

明治三十六年

五九、九九六^{佛噸}

六四、〇一一^{佛噸}

同 四十一年

一二四、〇〇二

一〇〇、三〇二

大 正 二 年

二四、三〇九

三六、二九一^{佛噸}

大正二年より五ヶ年後の大正七年の需要額は大正二年の需要高に五ヶ年間の需要増加額と増加額の増率とを加へたるものに等しと假定し算定す、即ち

大正二年

五ヶ年間の増加額

増加額の増率

大正七年の需要額 〓 二二四、三〇九 + 一〇〇、三〇二 + 三三六、二九一 〓 三六〇、九〇二^{佛噸}

大正二年の需要額 〓 三六〇、九〇二 + (三六〇、九〇二 - 二二四、三〇九) + 三三六、二九一 〓 五三三、七八六

以上の如くにして計算を進むるときは次の如き表を得へし。

年次

需要額

大 正 七 年

三六〇、九〇〇^{佛噸}

同 九 年

四三〇、〇〇〇

同 十 三 年

五三三、八〇〇

同 十 四 年

六一七、五〇〇

同十七年 七四三、〇〇〇
 備考 明治三十四年より同三十八年に至る需要高は製鋼原料高を製品數量等に依り五九、七
 二〇佛噸と推算し推定せしものに係る。

鋼材需要額調

年次	内地產出高	輸移入高	合計	輸移出高	差引需要高
明治二十九年	一、一九二	二二〇、七五七	二二一、九四九	—	二二一、九四九
同三十年	一、〇八〇	二三一、七〇五	二三二、七八五	—	二三二、七八五
同三十一年	一、一〇〇	二七四、三七三	二七五、四七三	—	二七五、四七三
同三十二年	九〇八	一五〇、五一五	一五一、四二三	—	一五一、四二三
同三十三年	九七〇	二八八、八一八	二八九、七八八	—	二八九、七八八
以上五ヶ年間の年平均	一、〇五〇	二二三、二三四	二三四、二八四	—	二三四、二八四
明治三十四年	六、〇三三	一八六、〇四二	一九二、〇七五	—	一九二、〇七五
同三十五年	三一、〇三三	一九二、四一三	二二三、四四六	五、二六三	二一八、一八三
同三十六年	三九、七八八	二三一、四三〇	二七一、二一八	四、四七九	二六六、七三九
同三十七年	五九、九四五	二五三、九九九	三一三、九四四	三、七五五	三一〇、一八九
同三十八年	七一、一二七	三七八、〇四一	四四九、一六八	三、九五七	四四五、二一一
以上五ヶ年間の年平均	四一、五八五	二四八、三八五	二八九、七七〇	三、四九一	二八六、四七九
前五ヶ年の年平均に 比し増進割合	三八六、〇五	〇、六五	二三四	—	二三四
明治三十九年	六九、三七五	三四八、一三六	四一七、五一一	四、九四二	四一二、五六九
同四十年	九〇、五七九	四六四、〇六三	五五四、六四二	一七、〇二八	五三七、六一四

拔萃 製鐵業調査會答申書

同 四十一年	九九、二五五	四三九、九三九	五三九、一九四	一一、七一九	五二七、四七五
同 四十二年	一一〇、九八二	二八〇、一〇四	三八三、〇八六	一五、〇五四	三六八、〇三二
同 四十三年	一六七、九六七	三六六、〇二七	五五三、九九四	一七、二四七	五一六、七四七
以上五ヶ年間の年平均	一〇六、〇三二	三七九、八五四	四八五、六八五	一三、一九八	四七三、四八七
前五ヶ年の年平均に	一五、五〇	五、二八	六、七五	二七、八〇	六、四九
比し増進割合					
明治四十四年	一九一、七〇〇	四八八、九一一	六八〇、六一一	二五、六六六	六五四、九四五
大正元年	二一九、七一四	六四〇、九六六	八六〇、六八〇	三七、一二九	八二三、五五一
同 二年	五五四、九八二	五四三、九一〇	七九八、八九二	三三、二二〇	七六五、六七二
同 三年	二八二、五一六	四〇八、四六七	六九〇、九八三	二九、六二二	六六一、三六一
同 四年	三三五、五〇九	二四三、三八二	五七八、八九一	二五、〇〇〇	五五三、八九一
以上五ヶ年間の平均	二五八、八八三	四六五、二二七	七三三、〇一一	三〇、二二七	六九一、八八四
前五ヶ年の年平均に	一四、三三三	二、三三五	四、八七七	一一、八三三	四、六五
比し増進割合					

附記

本表に掲ぐるもの、外大正元年より大正三年迄に船舶機械、鐵道用車輛機關等として輸入せられたるものは一ヶ年平均所要鋼材を概算すれば船舶七〇、七二〇噸機械九、八八八噸、鐵道車輛機關等一一、四一六噸となる

鋼材需要見込額調

前表に依るに明治三十四年より同三十八年に至る五ヶ年間の需要平均額は二八六、四七九佛噸にして是を其中間即ち明治三十六年の需要高と見做す。

明治三十九年より同四十三年迄の平均額は四七二、四八七佛噸にして是を明治四十一年の需要高と見做す。

明治四十四年より大正二年迄の平均額は七四八、〇五〇佛噸にして是を大正二年の需要高と見做す(大正三、四年は歐洲戰亂の影響に依り輸入減少し其事情平年と異なるを以て之を除きたり)

年次	需要高	五ヶ年間の需要増加額	増加額の増率
明治三十六年	二八六、四七九 ^{佛噸}	一八六、〇〇八 ^{佛噸}	
同 四十一年	四七二、四八七	二七五、五六九	
大正二年	七四八、〇五六		八九、五六一 ^{佛噸}

大正二年より五ヶ年後の大正七年の需要額は大正二年の需要高に五ヶ年間の需要増加額と増加額の増率とを加へたるものに等しと假定して算定す即ち

大正二年 五ヶ年間の増加額 増加額の増率

大正七年の需要額 〓 七四八、〇五六 + 二七五、五六九 + 八九、五六一 〓 一、二二三、一八六^{佛噸}

大正十二年の需要額 〓 一、二二三、一八六 + 一、二二三、一八六 + 一、二二三、一八六 + 一、二二三、一八六 + 一、二二三、一八六 〓 一、五六七、八七七^{佛噸}

以上の如くにして計算を進むるときは次の如き表を得へし。

年次	需要額
大正七年	一、二二三、〇〇〇
同 九年	一、二九五、〇〇〇
同 十二年	一、五六八、〇〇〇
同 十四年	一、七八六、〇〇〇
同 十七年	二、二一二、〇〇〇

二、本邦及支那に於ける銑鐵及鋼材生産額の近き將來に於ける見込左の如し、

生産見込高

銑鐵

種別	年次	計										
		支那	滿洲	朝鮮	内地	支那	滿洲	朝鮮	内地	支那	滿洲	朝鮮
大正四年	三四五、六〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正五年	四九一、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正六年	五三九、九〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正七年	五四一、五〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正八年以後	五四一、五〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正十一年以後	六一一、五〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正四年	三〇、〇〇〇											
大正五年	二〇〇、〇〇〇											
大正六年	二〇〇、〇〇〇											
大正七年	七二六、〇〇〇											
大正八年以後	八〇九、九〇〇											
大正十一年以後	五七五、六〇〇											

鋼材

種別	年次	計										
		支那	滿洲	朝鮮	内地	支那	滿洲	朝鮮	内地	支那	滿洲	朝鮮
大正四年	四〇五、一〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正五年	五六九、六〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正六年	六八六、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正七年	七六五、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正八年以後	七七〇、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正十一年以後	一、〇九〇、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正四年	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇
大正五年	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇	四五一、一〇〇
大正六年	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇	六一九、六〇〇
大正七年	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇	七四六、〇〇〇
大正八年以後	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇	八二五、〇〇〇
大正十一年以後	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇

備考 本表の外内地産銑鐵の産額約千六百噸内外ありとす。

銑鐵欄の朝鮮とあるは兼二浦、滿洲とあるは本溪湖及鞍山站、支那とあるは大冶及漢陽の分を計上したるものにして又鋼鐵欄の滿洲とあるは鞍山站、支那とあるは漢陽なりとす。

三、本邦に於ては酸性鋼の製出に適する銑鐵を多量に生産すること困難なりと雖も普通鋼材に付ては其品質外國産に比し敢て差異あるを認めす。

本邦に於ける銑鐵生産費は歐米諸國に比し著しく高價なりと認めざるも資本を要すること多く
 利子税金雜費等比較的多額に上るを見る、然れとも製銑業は將來本邦に於て成立し得る見込あり
 と認む。

製鋼業に付ても亦同様なり。

第二諮問事項答申参考書類として提出せるもの左の如し。

輸入諸機械類使用鐵鋼材推算表

大正元年 度

種 別	全 部			鋼 部			鑄 鐵 部		
	數量	價額	單價	數量	價額	單價	數量	價額	單價
フエールエコノマイザ	六二七	八四、四四〇	一三七	一三三	三三、五四	二六三	四九四	五一、九二六	一〇五
瓦斯石油熱氣機關	二、二五九	一、三九〇、一九〇	六一八	二二六	四九七、七二一	二、二〇二	二、〇三三	八九三、四八七	四三九
ウオタタータービン及 ペルトン 水車	一、五八〇	八〇八、八〇四	五一二	三三六	三三、一五三	九八七	一、二六四	四九六、六五二	ハ三九三
發電機及電動機類	四、九四〇	三、九六六、四二一	八〇三	一、四八二	二、七〇四、二五一	一、八二五	三、四五六	一、二六二、一七〇	ニ三六五
縫 衣 機	一、二〇八	一、二一〇、四〇六	八五	八五	七、八四、四五一	八、六二五	一、一三三	四八、九五五	ホ四二九
金屬工及木工機械	七、四五二	三、九六六、四二一	五三三	五三二	一、〇八四、一六五	二、〇七九	六、九二九	二、八八二、二五〇	ヘ四一六
紡 績 機 械	四、二四〇	一、八〇二、五五五	四二七	八四八	一、二〇三、一七一	一、四一七	三、三九二	六〇〇、三八四	ト一七七
汽罐同部品及附屬品	二、九三六	一、一七四、七二五	四〇〇	二、八七七	一、一六五、九〇七	四〇五	五九	八、八〇八	チ一五〇
蒸汽機關及スチーム タ ー ビ ン	六五五	五二四、六〇四	八〇〇	一三二	二九、九四八	二、二三三	五三四	二、三三、六五六	リ四四四
自動車及部分品	二二四	八、九四、三八八	四、〇〇〇	二二三	八、七五、九三一	四、二二〇	一一	一八、四五七	ヌ一、六四八
自轉車及部分品	一八五	二、〇〇二、八八〇	一〇、八四〇	—	—	—	—	—	—

其他の機械及部分品

鐵と鋼 第參年 第參號

三七八

計

備考

イ鋼と鑄鐵との重さの比を二〇・八〇とし單價の比を略二・五二とす
 ハ鋼と鑄鐵との重さの比を二〇・八〇とし單價の比を略二・五二とす
 ホ鋼と鑄鐵との比を七・九三とし單價の比を略五・二とす
 ト鋼と鑄鐵との比を二〇・八〇とし單價の比を八・二とす
 リ鋼と鑄鐵との比を二〇・八〇とし單價の比を略五・二とす
 ル總て鋼のみ

ロ鋼と鑄鐵との重さの比を一〇・九〇とし單價の比を略五・二とす
 ニ鋼と鑄鐵との比を三〇・七〇とし單價の比を五・二とす
 ヘ鋼と鑄鐵との比を二〇・八〇とし單價の比を八・二とす
 チ鑄鐵部の重さを全重量の二%とす
 ヌ鑄鐵部の重さを全重量の四%とし單價を鋼の二・五分の一とす
 ナ鋼と鑄鐵との單價の比を約四・二とし重さの比を一〇・九〇とす

大正二年度

種別	全部			鋼部			鐵鑄部		
	數量	價額	單價	數量	價額	單價	數量	價額	單價
フニールエコノマイザー	九三二 <small>噸</small>	一四六、二六二	一五七	一八六 <small>噸</small>	五六、一九四	三〇一	七四六 <small>噸</small>	九〇、〇六八	一二一
瓦斯石油熱氣機關	一、九三六	一、二六二、二五二	六五三	一九四	四五、〇三六	二、三三九	一、七四二	八二〇、二二六	四六五
ウオタタービン及	一、三三四	七二八、八七一	五五〇	二六五	二八〇、八三〇	一、〇六〇	一、〇五九	四四八、〇四一	四三三
ペルトン水車	五、二二〇	三、六五九、一三〇	六九六	一、五七八	二、四九五、六一八	一、五八〇	三、六八二	一、二六三、五二二	三二六
發電機及電動機類	八六四	八〇九、九〇九	九三七	六〇	四八四、四八四	八、〇一〇	八〇四	三三五、四三五	四〇五
縫衣機	五、八七〇	三、二七九、〇二五	五五	四二一	八九八、八五八	二、一八七	五、四五九	二、三八〇、一六七	四三六
金屬工及木工機械	二、三四九〇	五、〇六九、七九五	三七七	二、六九八	三、三八六、二四一	一、二五五	一〇、七九二	一、六八三、五五三	一五六
紡績機械	二、四三三九	九七六、三三一	四〇〇	二、三九一	九六九、〇三二	四〇五	四八	七、三三〇	一五〇
汽罐同部品及附屬品	七九一	六三三、〇一五	八〇〇	一、五八	三五一、九六三	二、二七七	六三三	二八一、〇五三	四四四
蒸汽機關及ス	二七八	一、一〇九五、〇六	四〇〇	二、六七	一、〇九二、一八〇	四〇九六	一一	一八、三二六	一、六六六
自動車及部分品									

二七〇九九	一三、五四九、六五六	五〇〇	二、七二〇	四、一八四、二七七	一、五四四	二四、四八九	九、三六五、三七六	ヲ	三八四
五、三三九四	三、三三七、五、四八五	一、七二六	九、五三三	一、三〇、七九、四七八	二、三三五	四三、六七六	一六、二九三、一二七		四五〇

自轉車及部分品
其他の機械及部分品

計

大正三年度

198	2,134,281	10,840	3,361	5,189,309	1,543	3,025,531	11,617,998	384
3,361	1,680,730	500	5,189	3,309	1,543	3,025,531	11,617,998	384
66,996	3,661,469	1706	11,569	15,654,734	2,272	55,229	1,882,567	451

種別

全部

鋼部

鐵鋼部

種別	全部			鋼部			鐵鋼部		
	數量	價額	單價	數量	價額	單價	數量	價額	單價
フエールエコノマイザー	588	84,471	144	128	3,492	276	470	51,970	110
瓦斯石油熱氣機關	477	365,659	768	48	130,833	2,742	429	234,827	547
ウオータータービン及ペルトン水車	530	331,746	607	106	133,738	1,267	424	198,008	467
發電機及電動機類	3,350	2,407,634	722	975	1,643,234	1,675	2,275	764,400	336
縫衣機	159	29,485	185	11	124,662	11,90	148	94,833	596
金屬工及木工機械	4,480	2,480,627	555	314	680,743	2,170	4,166	1,799,884	432
紡績機械	1,238	5,333,391	431	2,448	3,560,401	1,454	9,790	1,771,990	181
汽罐同部品及附屬品	2,252	860,851	400	2,109	854,401	405	43	6,450	150
蒸汽機關及スチム・タービン	770	615,892	800	154	343,388	2,233	616	273,504	444
自動車及部分品	135	498,432	4,000	130	490,227	4,009	5	8,195	1,639
自轉車及部分品	95	1,035,094	10,840	—	—	—	—	—	—
其他の機械及部分品	22,586	1,079,269	500	2,159	3,333,932	1,544	19,437	7,459,776	384
計	46,450	25,014,970	1,768	8,562	11,316,040	2,631	37,793	12,663,836	481

大正四年度

拔萃製鐵業調査會答申書

種別	全部			鋼部			鐵鑄部		
	數量	價額	單價	數量	價額	單價	數量	價額	單價
フユールエコノマイザー	四二四 <small>頭</small>	六、九二六 <small>円</small>	一五〇 <small>円</small>	八三 <small>頭</small>	三、八二七 <small>円</small>	二八 <small>円</small>	三三二 <small>頭</small>	三、〇八八 <small>円</small>	一一五 <small>円</small>
瓦斯石油熱氣機關	一四〇	一、六三六〇	八三一	一七	三六、四五三	二、六八三	一三六	七九、九〇七	六三六
ウォータータンビン	一三六	一、六三三九	八五四	二四	四四、七八一	一、六三九	一〇九	七二、五七六	六五五
及ペルトン水車	五六八	五〇、四〇六	八八三	一七三	三四四、七五〇	一、九八八 <small>以下鋼物含ふ</small>	三九五	一五六、六五六	三九七
發電機及電動機類	二二一	二四三、一五六	一、〇九八	一五	一四六、一四六	九、四四七	二〇六	九七、〇一〇	四七二
縫衣機	一、四一〇	八九〇、九一八	六三二	九九	二四四、三四七	二、四七五	一、三一	六四六、五七一	四九三
金屬工及木工機械	二、七一〇	一、三三五、五七九	四九四	五四二	八九一、一三九	一、六四四	二、二六八	四四四、四四〇	二〇五
紡績機械	一、四二五	五七三、〇七一	四〇〇	一、三九七	五六八、八一	四〇五	二八	四、二六〇	一五〇
汽罐同部分品及附屬品	九八	七八二、八二	八〇〇	二〇	四三、五三六	二、四五八	六	三四、七五六	四四四
蒸汽機關及スチムタービン	四二	一、六五二、六四	四、〇〇〇	四〇	一、六二、六六四	四、一〇二	二	二、六〇〇	一、五七六
自動車及部分品	二九	三、三三〇、二	一〇、八四〇	—	—	—	—	—	—
自轉車及部分品	八、二九六	四、〇九八、〇〇八	五〇〇	八三〇	一、二五八、〇九四	一、五三五	七、三七六	二八三、九二四	三八五
其他の機械及部分品	一五、三八九	八、四九三、三三〇	一、七九〇	三、三三〇	三、七六四、五三八	二、六〇六	一一、一三〇	四四一、五七八〇	五〇三
計									
輸入船舶機械類鋼材調									
種目	年次	大正元年	大正二年	大正三年	以上三年平均	大正四年			
輸入機械類鋼材		六、五三三 <small>頭</small>	一一、五六九 <small>頭</small>	八、五六二 <small>頭</small>	九、八八八 <small>頭</small>	三、二三〇 <small>頭</small>			
輸入鐵道車輛機關等鋼材		一一、八〇三	二〇、六八五	一一、七六一	一一、四一六	二、一三〇			
輸入船舶鋼材		七六、二〇九	八六、〇四〇	四九、九二二	七〇、七二〇	三九、一八一			

合 計 九七、五四五 一〇八、二九四 七〇、二三五 九二、〇二四 一四、八四七

輸入汽船使用鋼材量推算高

年 次	隻數	總噸數	船體部使用鋼材量			機關部使用鋼材量		
			鋼板	形鋼	棒鋼其他	鑄鐵	鍛鋼	汽罐用鋼板
明治四十四年	四九	一二九、四五四	四四、五〇〇 <small>噸</small>	一五、〇〇〇 <small>噸</small>	四、五〇〇 <small>噸</small>	六、二〇〇 <small>噸</small>	三、一〇〇 <small>噸</small>	四、五〇〇 <small>噸</small>
大正元年	二二	四八、九四九	一七、〇〇〇	五、七〇〇	一、七〇〇	二、三二〇	一、一六〇	一、七〇〇
同 二年	二七	五五、二二〇	一九、五〇〇	六、三〇〇	一、九〇〇	二、六五〇	一、三二〇	一、九〇〇
同 三年	一三	三二、一八二	一一、〇〇〇	三、七〇〇	一、一〇〇	一、五五〇	七八〇	一、一五〇
同 四年	一一	二五、〇八一	八、七〇〇	三、〇〇〇	九〇〇	一、二〇〇	六〇〇	九〇〇

第三諮問事項 官民製鐵業の調和に關する事項。

答 申

政府は將來民間製鐵業者と協議し以て相互の競争を避け官民製鐵業の調和を圖るに努むること
 第四諮問事項 製鐵業の發達を促すに必要な事項。

答 申

- 一、年額三萬五千噸以上の銑鐵生産能力(製銑を基礎とし製鋼事業を爲すものを含む)を有する製鐵所の敷地に付ては他人の土地を使用又は收用し得るの途を開くこと。
- 三、國有林野にして製鐵所敷地に必要なるものは差支なき限り特賣又は長期貸與を許可すること
- 三、年額三萬五千噸以上の製銑又は製鋼能力を有する製鐵所を設立する者に對しては事業開始の翌年より向十ヶ年間營業稅、所得稅、府縣稅、市町村稅等一切を免除すること。
- 四、低磷銑鐵の生産に付ては政府に於て相當獎勵を爲すこと。

五、朝鮮に於て設立する製鐵所の生産品に對しては移入税を賦課せざること。

六、支那に於て本邦人の經營する製鐵所の生産品に對しては政府は出來得る限り之を保護すること。

七、官設製鐵所に於ては製銑製鋼事業の爲め利益の幾分を割きて一層研究に努むること。

八、製鐵業に要する技術者及職工に付ては官設製鐵所に於て出來得る限り其養成に務むること。